

【古文】

この御子三つになりたまふ年、御袴着のこと一の宮のたてまつりアしに劣らず、内蔵寮、納殿の物を尽くして、いみじうセイさせたまふ。それにつけても、①世の誹りのみ多かれど、この御子のおよすけておはする御容貌心ばへありがたくめぐらしきまで見えたまふを、え嫉みあへたまはず。もの心知りたまふ人は、「かかる人も世に出でおはするものなりウけり」と、あさましきまで目をおどろかしたまふ。

その年の夏、②御息所、はかなき心地にわづらひて、まかでなむとしたまふを、暇さらに許させたまはず。年ごろ、常の篤しきになり**A**たまへれば、御目馴れて、

「なほしばしころみよ」

とのみのたまはするに、日々に重りたまひて、ただ五六日のほどにいと弱うなれば、③母君泣く泣く奏して、まかでさせたまつりたまふ。かかる折にも、あるまじき恥もこそと心づかひして、御子をば留めたてまつりて、忍びてぞ出でたまふ。

限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず、御覧じだに送らぬおぼつかなさ、言ふ方なく思ほさる。いとにほひやかにうつくしげなる人の、いたう面痩せて、いとあはれとものを思ひしみながら、言に出でて聞こえやらす、あるかなきかに消え入りつつものしたまふを御覧するに、来し方行く末思し召されず、よろずのことを泣く泣く契りのたまはずれど、御いらへもえ聞こえたまはず、まみなどいよとたゆげにて、いとどなよなよと、我かの気色に

て臥したれば、いかさまにと思し召しまどはエる。輦車の宣旨などのたまはせても、また入らせたまひて、さらにえ許させたまはず。

「④限りあらむ道にも、後れ先立たじと、契らせたまひけるを。さりとも、うち捨てては、え行きやらオじ」

とのたまはするを、女もいといみじと、見たてまつりて、

「⑤限りとて別る道の悲しきにかまほしきは命なりけり  
いとかく思ひ**B**たまへましかば」

と、息も絶えつつ、聞こえかまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、かくながら、ともかくもならむを御覧じはてむと思し召すに、「今日始むべき祈りども、さるべき人びとうけたまはれる、今宵より」と、聞こえ急がせば、わりなく思ほしながら⑥まかでさせたまふ。

⑦御胸つとふたがりて、つゆまどろまれず、明かしかねさせたまふ。御使の行き交ふほどもなきに、なほいぶせさを限りなくのたまはせキつるを、

「夜半うち過ぐるほどに**C**なむ、絶えはてたまひウめる」

とて泣き騒げば、御使もいとあへなくて帰り参りぬ。聞こし召す御心まどひ、何ごとも思し召しわかれず、籠もりおはします。

御子は、かくてもいと御覧せまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでたまひ**D**なむとす。何事かあらむとも思したらず、さぶらふ人びとの泣きまどひ、主上も御涙のひまなく流れおはしますを、あやしと見たてまつりたまへるを、⑧よろしきことにだに、かかる別れの悲しからぬはなきわぎなるを、ましてあはれに言ふかひなし。

【与謝野晶子訳】

第二の皇子が三歳におなりになった時に袴着の式が行なわれた。前にあ

った第一の皇子のその式に劣らぬような派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌と聡明さとが類のないものであったから、だれも皇子を悪く思うことはできなかつた。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生まれてくるものかと皆驚いていた。

その年の夏のことである。御息所——皇子女の生母になった更衣はこう呼ばれるのである——はちよつとした病氣になって、実家へさがろうとしたが帝はお許しにならなかつた。どこからだが悪いということはこの人の常のことになっていたから、帝はそれほどお驚きにならずに、「もうしばらく御所で養生をしてみたらにしようがよい」

と言つておいでになるうちにしだいに悪くなつて、そうなつてからほんの五、六日のうちに病は重体になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛が行なわれるかもしれない、皇子にまで禍いを及ぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目だたぬように御息所だけが退出するのであつた。

この上留めることは不可能であると帝は思召して、更衣が叫んで行くところを見送ることのできぬ御尊貴の御身の物足りなさを堪えがたく悲しんでおいでになつた。はなやかな顔だちの美人が非常に痩せてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが口へは何も出して言うことのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱っているのを御覧になると帝は過去も未来も真暗になつた気があそばすのであつた。泣く泣くいろいろな頼もしい将来の約束をあそばされても更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうで、平生からなよなよとした人がいつそう弱々しいふうになつて寝ているのであつたから、これはどうなることであらうという不安が大御心を襲うた。更衣が宮中から輦車が出てよい御許可の宣旨を役人へお下しになつたりあそばされても、また病室へお帰りになると今行くということをお許しにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家へ行つてしまふことはできないはずだ」

と、帝がお言いになると、そのお心持ちのよくわかる女も、非常に悲しうにお顔を見て、

「限りとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり

死がそれほど私に迫つて来ておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えに言つて、なお帝にお言ひしたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなつてしまつた。死ぬのであつたらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召したが、今日から始めるはずの祈禱も高僧たちが承つていて、それもせひ今夜から始めねばなりませんというようなことも申し上げて方々から更衣の退出を促すので、別れがたく思召しながらお帰しになつた。

帝はお胸が悲しみでいっぱいになつてお眠りになることが困難であつた。帰つた更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ帰つて来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ち遠しいであらうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去になりました」

と言つて、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると力が落ちてそのまま御所へ帰つて来た。更衣の死をお聞きになつた帝のお悲しみは非常に、そのまま引きこもつておいでになつた。

その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、穢れのやかましい宮中においておきたく思召したが、母の更衣の実家へ退出されることになつた。皇子はどんな大事があつたともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけ不思議にお思ひになるふうであつた。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心持ちほどお気の毒なものではなかつた。

(1) **古典文法** ～～アケの助動詞について、【例】にならって説明しなさい。

【例】 打消の助動詞「ず」の終止形 …… **打消「ず」終止**

(2) **古典文法** AとBの**たまへ**の違いを説明しなさい。

(3) **内容把握** ①について、「世の誹り」が多い理由を説明しなさい。

(4) **現代語訳** ②を、「許させたまはず」の主語を明らかにして現代語訳しなさい。

(5) **古典文法** ③について、「奏し」「まかで」「たてまつり」「たまふ」は誰に対する敬意を表しているか。それぞれ答えなさい。

(6) **現代語訳** ④を現代語訳しなさい。

(7) **和歌の修辞** ⑤には掛詞が用いられている。その掛詞を抜き出し、かけられている意味を説明しなさい。

(8) **内容把握** ⑥について、帝が桐壺の更衣を退出させたのはなぜか。理由を説明しなさい。

(9) **現代語訳** ⑦を、主語を明らかにして現代語訳しなさい。

(10) **古典文法** CとDの**なむ**の違いを説明しなさい。

(11) **現代語訳** ⑧を現代語訳しなさい。

(12) **古文常識** 平安時代、幼児の成長を願って行われた儀式は何か。【古文】から抜き出して答えなさい。

(13) **古文常識** 「限りあれば、さのみもえ留めさせたまはず」の「限り」は、「宮中における掟」の意味である。この掟の内容を説明しなさい。

(14) **文学史** 次の文章の A から C に当てはまる言葉を答えなさい。

九世紀末に開花した**国風文化**では、**万葉仮名**を簡略化した A が発明された。この A が普及したことで文学も発展した。文学における物語のジャンルには、『竹取物語』などの「B」と、『伊勢物語』などの「C」とがある。これらの二つの流れは、平安時代中期に成立した『源氏物語』につながっている。

(14)	(13)	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)	
A	B	C					意味	掛詞	たてまつり	奏し			カ	ア
										まかで			キ	イ
										たまふ			ク	ウ
													ケ	エ
														オ

- (1) ア 過去「き」連体 イ 尊敬「さす」連用  
ウ 詠嘆「けり」終止 エ 自発「る」終止  
オ 打消意志「じ」終止 カ 希望「まほし」終止  
キ 完了「つ」連体 ク 完了「ぬ」連体  
ケ 断定「なり」已然
- (2) Aは尊敬の補助動詞で、Bは謙譲の補助動詞。

Aは、完了の助動詞「り」に接続しているので、四段活用動詞の已然形である。尊敬の補助動詞で、動作の為手である桐壺の更衣に対する敬意を表している。

一方、Bは、反実仮想の助動詞「まし」に接続しているので、下二段活用動詞の未然形である。謙譲の補助動詞で、動作の受け手である帝に対する敬意を表している。

- (3) 光源氏の袴着の儀式が、内蔵寮や納殿の物を使って盛大に行われたから。
- (4) 御息所が、頼りない感じに病んで、退出しようとしなざるのを、帝が休みを少しもお許しにならない。

・まかでなむとしたまふを ↓ 退出しようとしなざるのを

品詞分解をすると「まかで／な／む／と／し／たまふ／を」となる。

「まかで（＝まかづ）」は「退く・去る」の謙譲語で、「退出する・おいとまする」と訳す。「まかで」が未然形や連用形か判断できないため、「なむ」は文脈に即して考える。強意の助動詞「ぬ」の未然形に、意志の助動詞「む」の終止形が接続したと考えるのが自然である。したがって、「なぬ」は「きつと／しよう」と訳す。

・さらに許させたまはず ↓ 少しもお許しにならない

「さらに十打消の助動詞」で、「決して／＼ない」の意味。「許させたまはず」を品詞分解すると「許さ／せ／たまは／ず」となる。「せ」は尊敬の助動詞なので、「せたまふ」で二重尊敬。ここから、「許させたまはず」の主語を帝に特定する。

重要古語

- ・御息所 ↓ **名** 皇子・皇女を産んだ女御・更衣。  
・はかなき || はかなし ↓ **形** 頼りない。  
・まかで || まかづ ↓ **動** 退出する。おいとまする。  
・さらに十打消の語 ↓ **副** 決して／＼ない。

- (5) 奏し：帝 まかで：帝 たてまつり：桐壺の更衣（御息所）  
たまふ：母君

(6) 命に限りがある人生でも、死に遅れたり先だったりはするまいと、お約束になったものを。

・限りあらむ道 ↓ 命に限りがある人生

「限り」は、命に限りがあるということ。つまり、死出の旅を意味する。「む」は、体言（名詞）に接続すると婉曲の意味になることが多い。この場合、特に訳さなくてもよい。

・後れ先立たじ ↓ 死に遅れたり先だったりはするまい

「後る」は、桐壺の更衣に先立たれて、帝が死に遅れること。「先立つ」は、帝が桐壺の更衣を残して先立つこと。「じ」は、打消意志の助動詞。

・契らせたまひけるを ↓ お約束になったものを

品詞分解すると、「契ら／せ／たまひ／ける／を」となる。「せ」は尊敬の助動詞で、「せたまひ」で二重尊敬。会話の相手である桐壺の更衣がこの部

分の主語になるので、帝から桐壺の更衣に対する敬意を表す。「を」の解釈には諸説あるが、詠嘆を表す間投助詞で訳するのが自然であろう。

**重要古語**

契ら || 契る ↓ **動** 約束する。

(7) 掛詞：いか

意味：「行く」という意味の「行か」と、「生きる」という意味の「生か」がかけられている。

「命の限りとしてあなたとお別れする悲しさゆえに、行きたいのは生の道ですよ。」という訳になる。

(8) 桐壺の更衣に対する祈禱を今夜から始めなければならぬと急かされたから。

『『今日始むべき祈りども、さるべき人びとうけたまはれる、今宵より』と、聞こえ急がせば』を訳してまとめる。

(9) 帝は胸がずつとふさがって、全く眠れず、夜を明かすことがおできにならない。

・つゆまどろまれず ↓ 全く眠れず

品詞分解すると、「つゆ／まどろま／れ／ず」となる。「つゆ＋打消の語」で「全くくれない」と訳す。「れ」は、可能の助動詞「る」の未然形。

・明かしかねさせたまふ ↓ 夜を明かすことがおできにならない

品詞分解すると、「明かし／かね／させ／たまふ」となる。「かね」は、「く」することができない」という意味の補助動詞。「させ」は尊敬の助動詞で、「させたまふ」で二重尊敬なので、主語を帝に特定できる。

**重要古語**

・つと ↓ **副** そのまま。ずっと。

・つゆ＋打消の語 ↓ **副** 全くくれない。  
・まどろま || まどろむ ↓ **動** うとうとと眠る。  
・明かし || 明かす ↓ **動** 夜を明かす。  
・かね || かぬ ↓ **動** くることができない。

(10) Cは係助詞で、Dは強意の助動詞「ぬ」の未然形に意志の助動詞「む」の終止形が接続したもの。

「まかでたまひなむとす」の主語は光源氏。「退出なさろうとする」と訳す。

(11) 普通の場合でさえ、このような別れが悲しくないことはない次第なのに、まして悲しくてどうしようもない。

・悲しからぬはなきわざなるを ↓ 悲しくないことはない次第なのに

品詞分解すると、「悲しから／ぬ／は／なき／わざ／なる／を」となる。「ぬ」は、打消の助動詞「ず」の連体形。「を」は、逆接の接続助詞。

**重要古語**

・よろしき || よろし ↓ **形** 普通だ。たいしたことない。  
・わざ ↓ **名** 事の次第。こと。  
・言ふかひなし ↓ **形** どうしようもない。

(12) 袴着

(13) 死の穢れを避けるため、死が近づいている重病人を退出させるといふ掟。

(14) A ひらがな B 作り物語 C 歌物語